



ゆめっと ピサ:

ANJOGAKUEN
COMMUNICATIONE
MAGAZINE

2014年度版



愛知学泉大学・愛知学泉短期大学



加藤 彩菜 さん

愛知学泉短期大学生活デザイン総合学科2年。菅瀬ゼミ。得意のパソコンによるデザインづくりを活かしたうちわ作りや、炊き出しのカレーづくりを行う。



鈴木 諒 君

愛知学泉大学家政学部家政学科家政学専攻1年。岡崎キャンパスのボランティアサークルに所属。カレーづくりやボールゲーム等を担当。震災直後から被災地に何度も足を運んでいる。先の大学祭では実行委員も務めた。



小田 叶 さん

愛知学泉短期大学生活デザイン総合学科2年。木村ゼミ。安城学園高校時代は弦楽部員として現地の演奏会に参加。手紙のやり取りなど定期的な交流を続けている。

東北大震災から4年近くが経ち、人々の記憶の中からその痛みの記憶が少しずつ消えつつある昨今ですが、被災地の復興は遅々として進まず、高齢化や過疎化、そして心の問題等が課題となっています。息の長い支援、そして交流が求められています。

今回訪問したのは、安城学園と縁の深い宮城県気仙沼市の小学校と岩手県大船渡市の仮設住宅です。学生たちは事前研修を重ね、岡崎市の高齢者とジャムを作り、短大幼児教育学科が育てた野菜を持ち寄るなど、様々な人の思いを胸に現地を訪ねました。

短大生活デザイン総合学科・菅瀬ゼミの加藤さん「普段の勉強を活かし、PCでイラストを作って出力し、子どもたちとうちわやランチョンマット作りをしました。気仙沼の大島小学校へ行ったのですが、いきなり大勢で訪ねたので最初は怯えてしまう子や泣いてしまう子もいました。」

無理はありません。普段は静かな島暮らしをしている子どもたちからすれば、遠方からきた初対

面（めん）の学生がいきなり遊ぼうといつても、全員がすぐに心を開けるわけではないでしょう。「その時、子どもたちの気持ちが痛いほどわかりました。だから本当の姉になったつもりで接して、褒めて、自分自身も心から楽しめました。」初めは写真にも写りたがらなかったのに、帰る頃にはだっこした膝の上から離れない子もいたといえます。「生活物資を送るだけではない心の繋がり、相手の気持ちに沿った思いやりの大切さを痛感しました。」

大学家政学部の鈴木君は、震災直後から何度も東北を訪ねている「ベテラン」です。今までに通算6〜7回は現地に足を運び、瓦礫の撤去から掃除までできることは何でも引き受けてきました。そんな彼女を見て、現地でいつもお世話になっている旅館の娘さんは今年春、わざわざ寮に入って鈴木君の母校の高校に入学したといえます。「田んぼに埋まったガードレールを引きずり出したら、アルバムや免許証が出てきて泣き出してしまふ人もいました。初めはボランティアに行った人が心を痛めることも多かったんです。」

さらに仮設住宅の人たちの気持ちにも変化があるといえます。「最初は『来てくれてありがとう』だったのが、今では『忘れられるのが怖い』とおっしゃるんです。それだけ人との結びつきを求めているんです。」何度も現地に足を運んでいる鈴木君だからこそわかる、心の声がかこにはあります。「震災という極限状態を経て、人が生きていく上で地域の結びつきがいかに大切かがわ

かりました。南海トラフ地震だっていつ起こるかわかりません。決して他人事ではないんです。」岡崎キャンパスのボランティアサークルに所属し、また大学祭実行委員を務める鈴木君は、この思いを胸に、昨年大学周辺の家を一軒一軒回って大学祭のチラシを配りました。その結果2日間で5千人が来場。大学が地域に根差してきたことを実感しているといえます。

一方、短大生活デザイン総合学科・木村ゼミの小田さんは、安城学園高校時代に弦楽部に所属、大学オーケストラ部とともに現地の演奏会に参加しました。「オーケストラを初めて見た方も多く、喜んで頂けたのが嬉しかったです。でもその時は地元の人と話をすることはあまりできず、びんこない部分がありました。今回は地元の人としっかり話すことができて、暮らしの状況や気持ちを聞けたのが勉強になりました。」

もともと木村ゼミでは、木村先生のご実家で収穫された甘夏を仮設住宅に送ったことから交流が始まり、定期的な手紙のやり取りも行っていました。小田さんたちはそこから一歩進んで、今年はみかんの花の苗を大量に育てて現地に送ろうと計画したのですが、「直前の台風で半分がダメに。残り半分を現地に送ったのですが、苗が未成熟でそれらも全滅。次はもっと寒い時期から育てて送らないといけないですね。」

学生たちは様々な失敗や試行錯誤を重ねながら、それぞれが貴重な体験と学びの場を得たようです。

先生からひとこと

岡崎キャンパス学生会顧問

愛知学泉短期大学
生活デザイン総合学科

菅瀬 君子 教授

普段、情報もネット経由でリアルタイムに手に入れている学生ですが、生身の人間の心の声を身体で聞いてほしい。そう思って学生を連れて行きました。実は行く前は不安で行くのを拒む学生が8割近くもいたんですよ。それが実際に現地に行ってみると気持ちが大きく変化しました。現地現物、頭でなく心と身体でぶつかることの大切さを再認識し、現地の方々の温かいご支援のおかげで人として大きく成長してくれました。

愛知学泉短期大学
生活デザイン総合学科

木村 典子 准教授

阪神淡路大震災の時は医療関係者として神戸に行きましたが、今回は別の意味で、地に足の着いた交流ができました。宮城と岩手の復興の差や、奇跡の一本松で有名な陸前高田市での大規模な高台造成工事など、思うところの沢山ある貴重な体験でした。学生たちは小さな失敗や発見を繰り返して、大きな成長を遂げてくれました。



特集

東日本 から学ぶ

安城学園は、これからも東日本の人たちとの絆を 深めて交流を続けていきます。

東日本大震災から4年近くが過ぎ、新聞やテレビでその話題が取り上げられることが減ってきました。しかし復興の足取りは依然として重く、社会全体としての継続的な支援が求められています。安城学園では多くの学生、生徒、園児、教職員が現地を訪れ、震災直後から様々な形の支援を続けてきました。これらの活動からは多くの交流も生まれ、そして東日本の人々の逞しさや、日本の発展に果たしてきたこの地域の役割の大きさを学びました。そこで安城学園と東日本とのつながり、今までの主な活動の姿を記します。

東日本から学ぶプロジェクト活動実績

●愛知学泉大学

- 被災地支援ボランティア (豊田学舎 H23、野球部 H24、岡崎学舎 H25,H26)
- 被災地支援スポーツ教室 (女子バスケットボール部 H24)
- 東日本と愛知を繋ぐコンサート (オーケストラ H24,H25,H26)
- サンマ祭り (豊田学舎 H24,H25,H26、岡崎学舎 H25,H26)

●愛知学泉短期大学

- 被災地支援ボランティア (H25,H26)
- サンマ祭り (H25,H26)

●安城学園高等学校

- 大船渡七夕ボランティア (H23,H24,H25,H26)
- 被災地支援ボランティア (野球部・男子サッカー部 H23,H24,H25,H26)
- 被災地支援スポーツ教室 (女子バレー部 H24)
- 東日本と愛知を繋ぐコンサート (弦楽部・合唱部 H24,H25,H26、吹奏楽部 H23,H26)
- 地歴公民科東北セミナー (H24,H25,H26)
- 大船渡東高等学校との交流 (H24～)

●岡崎城西高等学校

- 被災地支援ボランティア (H24,H25,H26)

●愛知学泉短期大学附属幼稚園

- 支援物資販売 (H23～)

●愛知学泉大学附属幼稚園

- 支援物資販売 (H23～)

●愛知学泉大学附属桜井幼稚園

- 卒園児による被災地訪問 (H24)
- 支援物資販売 (H23～)

●安城学園全体事業

- 東日本から学ぶ連続講演会 (H24)
- 創立100周年記念酒醸造 (H24)
- 東日本から学ぶプロジェクト基金 (H24～)

岡崎城西高等学校



中川 敦盛 君（3年生）

愛知教育大学附属岡崎中学校出身。
現インターアクト部副部長、元生徒会執行委員。
介護士である母親に薫陶を受け、将来は社会福祉士を志す。



山口 直也 君（3年生）

岡崎市立額田中学出身。
2014 年度前期生徒会長を務める。
人をまとめる大変さを痛感すると共に、相手のために何をすべきかを考えるようになる。

岡 崎城西高校は、東日本大震災復興支援ボランティア活動を続けて今年で3年目。きっかけは、あるクラスの担任がいちご農家へボランティアに行ったことでした。その翌年からは学校全体で復興支援を行っており、今年度は教員6名、生徒80名の計86名が宮城県の南三陸町と石巻市を訪れました。震災から4年目となった今を見て何を感じたのか、この活動の中心となって動いてくれた山口直也君、中川敦盛君、そして引率教員の森田佳和先生に話を聞きました。

中川君…「僕は、東北支援へ行くのは今回で2回目でした。前回はインターアクト部として行き、その時の経験を生かしてもっと効率よく動くぞと気合いを入れて行きました。」
山口君…「前は都合が合わず行けなかったのですが、今回こそはと思い参加しました。時間のある高校生のうちに自分の目で被災地を見て、これから何をすべきか考えようと思ったんです。」

実際にやってみてどうでしたか？

中川君…「A班の行った南三陸町は、道路と瓦礫が少しあるだけで、もともと家が建っていたところが手つかずのまま更地で広がっていました。お手伝いに行った商店街も、プレハブでできた仮設商店街といった感じでした。夕食後は、志津川の仮設住宅を訪問しました。雨のため準備していたビンゴゲームや花火はできませんでしたが、その分色々な話をお聞きすることができました。」

山口君…「僕はB班でした。こちらも雨で計画していた草むしりを中止し、集会場の掃除をしました。それでも、夕方過ぎには雨はやみ、ジャグリングを披露したり、ビンゴ大会や花火大会を行うことができました。石巻市は、海側は津波で流されてしまい、ほとんど何もなかったのですが、内地の方は山が津波を止めてくれたらしく、被害は少なかったですね。地域差はありますが、まちの中心は機能していました。」

印象的だった瞬間は？

中川君…「2日目にたまたま入った飲食店で、店員さんと話をしていたら、『この店も膝上まで水が来たんだよ』と言われたことが印象に残っています。今では当たり前のように営業して人が出入りしている場所でも、3年前には震災や津波の被害にあったのだと改めて考えさせられました。今回一緒に東北へ行ったメンバーの中には、石巻市役所の2階でカフェを運営している高校生から話を聞いた人もいます。前回のボランティアでは畑仕事で中心で交流をする時間があり取れませんでした。今回は現地の人から震災当時の様子や現在の暮らしなどを直接聞くことができました。実際に被災地へ行き、交流を深めることができただけでも貴重な経験です。」

森田佳和先生からひとこと

初めは、生徒の言動や行動で被災地の方を傷つけないか、本当に役に立つか心配でした。しかし、実際向こうに行くにつけてくれましたね。楽しそうに会話をしていたので安心して交流を通して生徒たちも何かを感じてく



仮設住宅の方にスライドで震災前後の写真を見せいただき、被災体験を聞かせていただきました。



震災の傷跡が生々しく残っている石巻駅。未だ復興は進まず、がれきが残っている。



仮設住宅訪問では、天候があやしくなったため、ビンゴ大会を変更し「じゃんけん大会」を行いました。景品は、晴れていたら行う予定だったスイカ割りの「スイカ」です！

れたらと思いますし、被災地の人の記憶にも残ってくれたら嬉しいです。また、本当のことを自身の目で確かめることの重大さを知り、報道で流れる情報を鵜呑みにしないという目覚めができただけでも連れていく価値はあったと思います。学校としては、今後とも細くとも長い交流を続けていきたいと思っています。

安城学園高等学校



大船渡七夕ボランティアでは、安城七夕まつりではおなじみの「願いごと短冊」を現地の方に書いていただき、山車を引くお手伝いなどもさせていただきました。

中根君…「1年生の冬、生徒会の街頭募金に参加した時、現地は一体どうなっているのかと思いました。そこで、七夕ボランティアの説明会で現地の映像やドキュメンタリーを見せてもらいました。映像を見たときは、自分では何もできないのではと思いましたが、それでも何か一つは残そうと思い、相手に笑顔になってもらう、ことを目標に行きました。」

加納さん…「中学3年、高校2年に続き、3回目の訪問です。初めは瓦礫が残っていたし、被災直後の人と話をしても、下手をすると相手を傷つけるのではと怖かったんです。その経験から2年生の時も初めはためらっていたのですが、先輩の話や先輩の話を聞いて、行くことを決めました。実際に行ってみると地元の人たちがすごく温かくて、杞憂だったとわかりました。3年生の時には不安や緊張はなく、すずんで参加しました。」

大船渡七夕ボランティアはどうでしたか？

中根君…「地域の人と世間話をしたり、向こうの高校生とお互いの学校のことを話したりしていたので、復興の手伝いというより地域や学校の絆を深めてきた感じでした。先輩たちがつないできたものの大きさも現地の人たちとの交流を通して伝わってきました。今回は言われたことをこなすのが精一杯だったので、先輩たちのようにもっと仕事を楽しんで出来るようになりたいです。そして、まだ東北のことを知らない人にも伝えていきたいと思いました。」

加納さん…「最近では被災地の報道をあまり見なくなりました。でも今でも仮設住宅に住む人は多いんです。瓦礫や原爆など物理的な部分にばかり費用が使われている気がしますし、東京オリンピックの費用も東北支援に充てられるのではと考えるようになりました。」

中根君…「それまで関心なかった政治や税金の使い道に興味を持つようになりました。前回の選挙では誰も東北支援について触れていませんでしたよね。社会に関心が向き、ニュースや新聞をよく見るようになり、親も驚いています。また、人とのコミュニケーションの大切さを感じました。実際に話さないと分からないことは多いし、テレビよりも体験談を直接聞く方が自然と心に入ってくる。自分自身が行動する引き金にもなると思いました。」

加納さん…「私もそれはすごく感じました。元々コミュニケーションは苦手だったんです。自分の言葉で相手を傷つけるのではと思い、また相手の思いを知るのも怖かったです。最初のボランティアでは特に、話を聞いていいの不安で、言葉にもすごく気をつけました。打ち解けてからは、深い話も聞けるようになりましたが、それまでは精神的にすごく大変でした。でもその壁を乗り越えられたから今の関係があると思います。」

これからに向けて

中根君…「先輩たちの活動を途切れさせないよう、自分から行動してこの活動の意義を皆に伝えていきたいです。今回、僕は自ら動く大切さを学びました。人に言われて動く一歩と、自分

から踏み出す一歩では、景色が違うことを感じてほしいです。」

和田圭吾先生からひとこと

安城学園高校では夏・冬の長期休暇に多くの生徒が東北に出かけています。野球・サッカー等の運動部は掃除などのボランティア活動で、吹奏楽・弦楽・合唱等の文化部は演奏会などを通じ、現地の人々と触れ合い様々なことを学んできます。また、地歴公民科主催の「東北セミナー」ツアーに参加し、各地を訪問し実際に目で見て学んでくる生徒もいます。東北の人々と触れ合う機会を多様に作り出し、またその機会を逃さず参加する生徒が多いことが、本校の特徴です。



中根 翔 君（2年生）

幸田町立南部中学校出身。
1 年生より学園実行委員へ所属し、2014 年度後期生徒会長に。
大船渡東高校の生徒会とも積極的に交流を図っている。



加納 咲里 さん（3年生）

岡崎市立北中学校出身。
2014 年度前期生徒会長を務める。
今回で東北ボランティアへ行くのは 3 度目で、大船渡に親友と呼べる友達もできた。



販売初日は 50 個以上の売り上げがあった



デンパーク入口や店舗前でもピラを配って宣伝



デンパーク内の「デキタッテ・トレタッテ工房」

が頭にあり、当初は僕たちもチンゲン菜を使った商品開発を目指しました。」

確かに昨年度の学生グループが考案したチンゲン菜ジュースは各方面でも好評で、しかも安城産の農畜産物を厳選して残ったものがチンゲン菜である以上、今年の学生たちがそれを使って新たな商品開発をしようと考えたのは無理ありません。学生リーダーの大平君は続けます。「昨年の焼き直しだという意見もありましたが、ひとつの食材の継続的な消費拡大はそれで意味があると考え、当初は『チンゲン菜・ジェラート＋サブレ』で意見がまとまりました。」

その後、デンパーク内でジェラート販売を行っている株式会社ネクストの社長を紹介してもらい、話はトントン拍子に進むと思いきや、学生たちには思いもよらない壁が待ち受けていました。「自信を持って考えた商品を提案しましたが、現場の方の意見は厳しいものでした。まず現行の商品ラインアップとの整合性がないこと、作るのに手間がかかること、そして決定的だったのは衛生面での配慮が足りなかったこととコスト管理が甘いことでした。」

管理栄養士専攻の学生は普段、少しでも美味しく栄養バランスの良いメニューを実習で考えています。しかしそこには商売の発想は乏しく、

生産性や原価管理には頭が向いていません。「結局、僕たち学生の自己満足的な押し付けだったんですね。現場でご商売をされている方は当然売れないものは扱わない。手間がかかり販売効率が悪いものもNG。お客様から代金を頂いて現金に触れる以上、扱う商品に直接手を触れるものもダメと、あらゆる面で現場を知らなすぎでした。」

その後、リスタートを余儀なくされた大平君達は、協議会の方たちとともに頭を悩ました結果、地元安城のお米に着目。さらにお米を使った甘酒を市内の酒造会社、神杉酒造株式会社が生産していることを突き止め、試行錯誤の上で「米粉・甘酒ジェラート」を開発しました。

「実際にはそれも苦労の連続でした。ジェラートに加える米粉の配合比率や混ぜ方はもちろんですが、米粉だけだと個性が弱すぎる。お米らしさを出そうと炊いたお米を混ぜてみると、今度はジェラートらしくな

くなり。その後20回以上の試作を重ね、最終的にお米の配合比率が13%の時、米粒も主張しすぎず最も美味しくできることを掴んだ彼らでしたが、ここからもまだ苦労は続きます。「通常僕たちが試作するとき、量は300cc程度、室温は一定の部屋で、お米は当然炊きたての美味しいご飯を使います。ところが実際の販売現場では、作業効率の面から作る量は最低でも1000cc。人の出入りがありますから室温だって変わります。ご飯が専門のお店ではないですから、お米は事前炊いて冷蔵庫に保管したものを使います。その結果、攪拌だけで力と時間がかかり、触感ももちっとしたものが出ないんです。」

現場の方の温かくも厳しいアドバイスを基に、その後も改善し続けた学生たち。満足のいくものが出来上がったのは12月の半ば過ぎ。23日からの販売に対して、まさにギリギリのタイミングでした。

ほのかに甘なお米の香り。
つぶつぶもちちりが美味しい。

先生からのコメント

当初は9月の収穫祭の時に売り出そうとしていた「米粉・甘酒ジェラート」ですが、私の指導が甘かったせいで、12月の販売になってしまいました。学生たちは企画段階から相当悩んだようです。食材の普及を家庭の消費で目指すのか、それとも販売で目指すのか。一度は決まったサブレ＋ジェラートの案も、作り置きをするサブレが水分を吸ってしまい美味しくないと問題もありました。産みの苦しみを嫌というほど経験した学生ですが、結果には大満足のようです。数年後には社会に旅立つ彼らにとって今回の経験はまさに宝ものと言えるのではないのでしょうか。普段の教室では学べない生の授業に、最後まで粘り強く協力してくださった関係者の皆様には本当に感謝しています。



店舗前にて。右から森田菜林さん、菊地美樹さん、美濃島奈々帆さん、大平圭祐君、久野裕喜君、井戸田圭介君、柴田清先生。左手前は株式会社ネクストの丸山社長

リーダーの大平君と
書記を務めた菊地さん



ゆめっとフォーカス

学泉大学・短大におけるPBL※

※ PBL (Project/Problem Based Learning) 課題 / 問題解決型学習

愛知学泉大学 家政学部 家政学科 管理栄養士専攻

テーマ「米粉・甘酒ジェラートの開発」

教員：柴田清准教授
学生：大平圭祐君、石田美里さん、田中宏佳君、森田菜林さん、井戸田圭介君、久野裕喜君、美濃島奈々帆さん、菊地美樹さん、三浦愛さん、桑原七海さん、熊澤有美さん、山崎千明希さん、尾崎真希さん（いずれも2年）

今回、管理栄養士専攻の2年生13名は、安城市農畜産物特産品協議会（安城市・安城商工会議所・JAあいち中央）との産学連携活動の一環として、安城産の米や米粉、甘酒を使ったジェラートを開発しました。開発には半年近くかかり、その間もかなりの紆余曲折がありましたが、昨年12月、無事商品化に成功し、安城産業文化公園デンパークでの販売にこぎつけました。

安城市はお米の生産量年間1万トンを誇る県内有数の生産地です。消費は米飯用が大半ですが、近年のコロナ離れの影響もあり、消費拡大と同時に新たな販路拡大が課題となっています。

市の農畜産物特産品協議会との会議を開催したのは昨年6月。12月にデンパーク内にある店舗、デキタッテ・トレタッテ工房でジェラートを販売してもらえらるまでの半年間、学生たちは様々な困難に直面し、眠れない日々が続きました。

「昨年度一つ上の先輩方が苦労して開発した『チンゲン菜ジュース』

愛知学泉短期大学 生活デザイン総合学科

テーマ「徘徊、行方不明高齢者ゼロのまちづくり ―移動型認知症カフェの展開―」

教員：木村典子准教授

学生：永井智子さん、壬生麻美さん、平久江里美さん、外山恵理香さん、小田叶さん、黒柳葉月さん、正入木光さん、原田恵果さん、小関愛子さん、松下歩佳さん（いずれも2年）

高齢化の進む日本で、認知症高齢者は全国におよそ480万人。認知症高齢者の事件や事故は年々増加しており、徘徊高齢者が問題となっています。2013年度には徘徊で行方不明になった高齢者は全国で1万人に達し、岡崎市内だけでも38人に上りました。この現状をうけ、愛知学泉短期大学 生活デザイン総合学科の木村ゼミでは、移動型認知症カフェ「ディメン太カフェ」を展開し、認知症に対する啓発活動を行い、徘徊行方不明高齢者ゼロを目指しています。

認知症はある日突然にやってくるわけではなく、多くは老化とともに毎日の生活の中で徐々に進行していきます。その意味では正常な「老い」の姿であり、一般的な病気とはその本質を異にします。しかしそれだけに本人も家族も気づかないまま症状が進むことが多く、一方でお年寄りの自発的な生き方や尊厳の問題にも関わってくるため、第三者が介入しづらい側面があるのも事実でしょう。こうしたデリケートな問題に対して、木村ゼミの学生たちは相手の立場に立った柔軟な手法で啓発活動を展開。新聞・テレビでも取り上げられるなど、当初の控えめな予想に反して、大きな反響を呼びました。

メンバーの永井さんと壬生さん「毎月、図書館交流プラザや岡崎市竜美丘会館で活動しています。今までに150人以上の方にきて頂いたのですが、来場者は家族が認知症という方や、自分が認知症なのではと心配な方、認知症のお客さんの対応に困っていたパスの運転手さんなど様々で、潜在的な問題の大きさに改めて気づきました。」



年配の方にも親しみやすいよう童話風の絵本や漫画も考えた

先生からのコメント

認知症カフェは、若年性認知症の人たちやその家族が集まれる場所をつくることを目的に、日本では自然発生的に民間レベルで始まったものです。今では全国に様々な形のカフェがあり、地域のNPOや病院、地域包括支援センターなどが広く活動を行っています。徘徊行方不明高齢者をゼロにいくために、地域の方に啓蒙活動を続けると同時に、地域ごとの特徴に合わせた連絡システムを確立する必要があると考えています。行政や警察、病院や関係各施設ともパイプをつくり、地域の人たちと一緒にこの活動を繋げていきたいですね。



ディメン太＝Dementia(英:認知症)+パンダ。何故パンダなのかはカワイイから…かな？

愛知学泉大学

現代マネジメント学部 現代マネジメント学科

テーマ「豊田市鞍ヶ池公園整備事業」

教員：岩本光一郎准教授、松岡崇暢講師

学生：池田聖都君、稲垣礼子さん、佛山睦輝君、中沖祐哉君 他（いずれも3年）

愛知学泉大学は、一昨年度に豊田市と包括連携協定を結び、地域社会への貢献と人材育成を狙いとして積極的に行政課題への取り組みを行っています。今回、同市より鞍ヶ池公園の整備事業への参加要請があり、現代マネジメント学部の学生約20名が、地元・鞍ヶ池公園里地里山会の方々と共に遊歩道整備等を行いました。



腐りにくく丈夫な木材を森から選んできて切断・加工。できる限り環境に負荷をかけないよう配慮しながら作業を進めた



鞍ヶ池公園は2005年3月に第1期再整備工事が完了し、ファミリーを中心に今や年間利用者数100万人以上を誇る人気の公園です。しかし「里地・里山エリア」を始めた整備が進んでいない箇所も

多く、せっかくの豊かな自然が十分に活かされていないという課題もあります。「週末には子ども連れの家族が大勢訪れるのですが、里山エリアには、小さなお子さん連れの方には少々不安がある箇所もあります。

今回学生さん達が協力してくれ、というところで、自分たちではなかなか手が回らない山道まで整備をしてもらえて、本当に助かっています。」今回、学生の指導に協力してくださった里山会の方々は口々にそう言います。

その一方、学生は自然相手の慣れない作業に当初非常に戸惑いました。「里山会の方に指導を頂き、さらにインターネットで調べ、試行錯誤しながら安全な階段の作り方を実践したつもりでした。しかし役割分担を明確にしないまま始めたため作業の効率率が非常に悪かったり、また雨水の流れを計算しなかったため土台の土が流れてしまったりと、初めは散々でした。それに対しその度に皆で話し合い改善を重ねた結果、最後は何とか形にすることができました。普段は教室で個人単位の勉強をすることが多いため、今回のような体験は本当に勉強になりました。」

今回の遊歩道整備は、行政の課題解決の観点からはほんのささやかな取り組みかもしれませんが、しかし市役所の方に直接問題点と課題を伺い、地元の人たちと協力しながら作業を進めた体験は、学生たちにとっては十分貴重な学びの場になったようです。

先生からのコメント

今回の実習では、本当は「階段なんてない方がいい」という意見も里山会の方から出ました。一人ひとりの歩幅が違うから歩きにくい人もいる、高齢者には膝に負担がかかってしまう、階段横に溝を作ったことにより自然環境が変わってしまうかもしれない。里山を知っているからこそその本音だと思います。社会では、その土地、その環境で実際に体験して初めて気づくことがたくさんあります。それは机で勉強しているだけでは分かりません。失敗も成功も自ら経験しなければいけない。学生たちはあまり里山に来たことがありませんでした。今回の実習で小さくても何かつかめたはずですよ。この活動の意義が働くようになってから分かってくれればいいと思っています。



豊田市都市整備部公園課及び鞍ヶ池公園里地里山会の皆さんと



安城学園高等学校 陸上競技部

個々の明るさと部の厳しさ その切り替えが強さの秘密

REPORT PROFILE (写真左より)



中内 真悠 さん
岡崎市立竜海中出身。前・投擲ブロック長。東海高校総体円盤投優勝。2014年度インターハイにやり投・円盤投・砲丸投の3種目で出場。

小林 紗矢香 さん
西尾市立西尾中出身。東海高校総体100mハードル4位。2014年度インターハイ100mハードル準優勝。

中島 恭佑 君
西尾市立東部中出身。前・キャプテン。東海高校総体・走高跳準優勝。三段跳5位。2014年度インターハイに走高跳・三段跳で出場、走高跳5位。

中野 真琴 さん
豊橋市立東部中出身。現・女子キャプテン。東海高校総体100m準優勝。200m準優勝。2014年度インターハイに100m及び200mで出場。

安城学園高校陸上競技部は、2014年度愛知県高校総体で女子が総合優勝。インターハイ(全国高校総体)には11種目8名が出場した。結果、女子100mハードルでは準優勝、その他の種目でも好成績を収め、その勝負強さを見せつけてくれた。彼ら・彼女らはいかにして実力を養っているのか。インターハイ出場の4人に話を聞いた。

をしてくれます。コーチの方もそれぞれ相当な経験者の方ですので、練習内容も濃く100%の信頼を持っています」。昨夏までキャプテンを務めた中島君は、安城学園高校陸上競技部の特長をそう総括してくれた。話を聞く限り、確かに練習内容は緻密でハードだ。夏休みの練習ではそのきつさに倒れ込む者すらおり、

タルを維持するのが大変で、集中と解放の切り替えが重要になってきます」。同じくインターハイに走高跳・三段跳で出場した中島君「跳躍系は自分の記録がライバルです。反省して修正してまた考えて…。こだわりが強くてマイペースでないとやってられないですね」。

種目によって

メニューも

悩みも様々。

高校から徒歩数分。住宅街にある安城学園高校陸上競技部の練習場は、特に目立った設備があるわけでもないごく普通のグラウンドだ。ソフトボール部・ソフトテニス部・ハンドボール部と敷地を共有し、シューズのグリップが効く陸上競技部の専用トラックもない。しかしここから毎年優秀な選手が続出し、今年は女子の部で愛知県NO.1の座にもついた。「うちの陸上競技部は種目ごとに5つのブロックに分かれています。顧問の先生2人と外部コーチ2人が、種目に応じたメニューとコーチング



スポーツ である以上、 負けん気も 大切

一方、短距離系は一発勝負の集中力が求められるという。負けん気や勢いも味方のうち。ハードルの小林さんはまさにそんなタイプだ。「私はもともと短距離走の選手なんです

が、冬休みには筋肉痛に悩まされるほど自らを追い込む。また練習の厳しさだけでなく、種目ごとの辛さや苦勞もあると言う。やり投・円盤投・砲丸投の3種目でインターハイに出場した中内さんは言う「投擲系の種目は、大会当日も1度投げてから次までに1時間くらい空きがあるんです。その間メン



厳しい練習を乗り越え、自分を高められるのも一緒に頑張る仲間がいるからこそ。

普段はものおじもせず底抜けに明るい、ひとたび練習に入ると別人であるかのような真剣さ。プロフェッショナルな指導とハードな練習、そして何より高校生らしいけじめのあるメリハリが、安城学園高校陸上競技部の最大の強みであると実感した。

大会成績 (主な大会・優秀な成績を掲載)

●愛知県高等学校総合体育大会

5月23日(金)～25日(日)

【男子】走高跳 中島 恭佑 優勝

三段跳 中島 恭佑 優勝

(団体得点)フィールド部門 優勝

【女子】4×100m R 優勝

100m 中野 真琴 優勝

200m 中野 真琴 優勝

円盤投 中内 真悠 準優勝

やり投 中内 真悠 準優勝

(団体得点)フィールド部門 優勝

トラック部門 準優勝

総合 優勝

●東海高等学校総合体育大会

6月20日(金)～22日(日)

【男子】走高跳 中島 恭佑 準優勝

【女子】4×100m R 準優勝

100m 中野 真琴 準優勝

200m 中野 真琴 準優勝

円盤投 中内 真悠 優勝

(団体得点)フィールド部門 優勝

総合 優勝

●愛知県陸上競技選手権大会

7月19日(土)・20日(日)

【女子】100m 中野 真琴 準優勝

100m H 小林紗矢香 準優勝

【男子】砲丸投 白藤 聖陽 優勝

●愛知県高等学校新人対校陸上競技大会

9月27日(土)・28日(日)

【男子】砲丸投 白藤 聖陽 優勝

岡崎城西を地でいく文武両道の精神。

REPORT PROFILE

宮地 克弥 君（写真右）
西尾市立平坂中出身。第47回愛知県剣道段別選手権大会男子三段の部・第3位。2014年の愛知県高校総体において団体戦第3位。2014年の愛知県高校新人戦個人戦第5位。また、同大会の団体戦でベスト8まで引った張った頼れる部長。

本村 礼奈 さん（写真左）
犬山市立南部中出身。2014年の愛知県高校総体において個人戦第3位（ちなみに2013年の愛知県女子剣道段別選手権大会二段の部優勝）。2014年の愛知県高校新人戦個人戦第5位、同大会団体戦優勝。岡崎城西高校剣道部創部初の愛知県制覇で、2015年3月の全国高校選抜大会に出場決定。



実践的かつ

基本に忠実な剣道で

全国を目指す！

岡崎城西高校剣道部は、男女ともにここ数年で目覚ましく力を伸ばしている。三河地区はもちろん県内でも有数の剣道王国へと成長している岡崎城西高校。個人戦・団体戦を問わず、大きな大会で彼ら・彼女らの活躍する姿を見ない日はない。選手の間が非常に厚く、まさに全員剣道、全員武道で県大会を勝ち進む剣道部の男女主将二人と顧問の森田智之先生に話を聞いた。

中学では敵なし。

その自信を正面から

へし折られる。

「小学校には珍しく、僕の通っていた学校には剣道部があったんです。小学4年の時に剣道部の顧問から誘



「顧問の森田先生に一度でいいから勝ちたい」と笑う2人



練習は気持ちをいかに強く持つかが大事。

われ、何気に始めたのがきっかけです。」男子剣道部を率いる宮地君は真面目で落ち着いた雰囲気の中にも、武道家らしい迫力と若者らしい明るさを持ち合わせた好青年だ。中学時代は1年生より大将を務め、県大会団体の部で優勝、全国中学校剣道大会に愛知県代表で出場するほど力をつけた宮地君だが、意外にも高校入学時にはそれまで感じたことのないくらいの挫折感を味わったという。「自分の剣道が全然通用しないんです。練習の質も量も、そして剣道に向かう姿勢そのものも。自分がいかに井の中の蛙だったかを思い知らされましたね。」

一度は落ち込んだ宮地君だが、やがて気持ちを切り替え、それまで以上に剣道に打ち込む日々が始まる。厳しく激しい練習を乗り越え、戦績は徐々に向上。今年は男子部員16名を率いる主将に任命された。この2年間で彼の中で一体何が変わったのか。

「入部当初は自分が強くなることしか頭にありませんでした。自分の実力向上を望む気持ちは今でも変わりませんが、仲間や後輩、そして部活全体をいかに強く楽しいものにしていくか。精神的な強さと全体を見渡す心の余裕ができたのが一番大きな変化だと思います。」

この先生となら

全国を狙える。

それを実力で証明。

一方、女子剣道部で主将を務める本村さんは、保育園時代から数えてキャリア10年を超えるベテラン剣士だ。幼いころから毎日2時間半、週4回の練習を地元の道場で続け、やがてその名は関係者なら知らぬ者がいないほどの実力をつけていく。各種大会で好成績を挙げた本村さんのもとは、中学3年の時、県外を含めて相当な数の高校がスカウトにきたという。現在顧問を務める森田先生も本村さんの非凡な才能を認め、犬山まで足を運んだ一人だ。しかし当時の岡崎城西高校は今ほどの実績はなく、過去の成績だけで見れば他校を選ぶ選択肢も十分にあった。そこで本村さんは冷静に自分の将来を考える「全国を狙える指導者は誰か。」考え抜いた彼女は、通学を考えるとして森田先生を「選ぶ」。



高校生らしい明るさとけじめのある剣道部。まさに岡崎城西。

大会成績

（主な大会・優秀な成績を掲載）

●愛知県高等学校総合体育大会

5月24日（土）・31日（土）

【男子】団体戦 第3位

【女子】個人戦 本村礼奈 第3位

団体戦 第3位

●東海高等学校総合体育大会

6月21日（土）・22日（日）

【女子】団体戦 第3位（初）

●愛知県女子剣道段別選手権大会

7月13日（日）

【女子】2段の部 井上 汀 優勝

●上毛新聞旗争奪高校剣道大会

8月21日（木）

【女子】団体戦 準優勝

●全国高等学校山内旗鷹潭杯争奪剣道大会

8月22日（金）

【女子】団体戦 第3位

●全三河高等学校剣道大会

8月23日（土）

【男子】団体戦 準優勝

【女子】団体戦 優勝（初）

●愛知県私学祭剣道大会

9月13日（土）

【女子】団体戦 優勝（2連覇）

●愛知県剣道段別大会

9月15日（月）

【男子】三段の部 柴田晃汰 第3位

宮地克弥 第3位

●愛知県高等学校新人体育大会

11月15日（土）・23日（日）

【男子】個人戦 宮地克弥 第5位

団体戦 第5位

【女子】個人戦 辻倉佑香 第5位

本村礼奈 第5位

団体戦 優勝（初）

愛知学泉短期大学附属幼稚園



柴田 家

母：美也子さん

子：果子ちゃん（太陽組）

幼稚園生活の中で、自然と思いやりの心が育ちました。

果子は幼稚園が大好きで、毎日幼稚園のことをお話してくれるんですが、いつも友達の話ばかりなんです。「今日○○ちゃんがこんなことしてくれたんだよ」「○○君がリレーですごかった」と、自分のことのように嬉しそうに話します。他のお母さんに聞いてみると、それは果子だけじゃないみたいで、友達のお母さんから果子の様子を知ることもあるんです。この園に入って、友達を思う気持ちが育ってくれたのが一番うれしいですね。

これも、先生方が子どもたち一人ひとりとしっかりと向き合ってくださっているおかげだと思います。その姿を子どもたちも見ていて、友達を褒めたり、困っている子を助けるということが自然にできるようになるんでしょうね。家庭ではなかなか教えることが難しいところなのですごく助かりました。

毎日楽しそうに通う果子の姿と成長を見るとこの幼稚園に通わせてよかったと心から思います。



1. 安城七夕まつりにて。一生懸命練習した鼓笛パレードを行いました。
2. 秋の運動会にて。組体操では大きな声を出して頑張りました。

愛知学泉大学附属桜井幼稚園

芝生や井戸水、自然に囲まれたのびのび遊べる環境が魅力です。

説明会でこの園に訪れた時、芝生を裸足で駆け回る園児たちを見てここに決めました。私自身も体を動かすことが好きで、子どもたちにも思い切り遊んで、この時期にしかできないことを学んでほしいと思ったんです。

特に楽しかったのは“夏祭り”ですね。お祭りで行われる井戸水ブラッシュは桜井幼稚園の自慢なんです！園が水浸しになることもおかまいなしに先生たちが放水してくれるんです。みんなびしょびしょになって盛り上がり、子どもたちはもちろん、保護者も先生も本当に楽しそうでした。

秋に行われる“森の音楽祭”では、短期間に教える先生と、それに応えようとする園児たちに感動しました。先生たちも本当に子どもたちを愛してくれているから、子どもたちも頑張って応えようとするんだと感じました。

柊音も幼稚園ではその時その時をすごく楽しそうに過ごしています。大らかな先生たちと、のびのび遊び学べる環境に本当に感謝してます。



比嘉 家

母：友紀さん

子：柊音くん（あおぞら組）



1. 夏祭りにて。大人も子どもも水遊びに夢中になりました。
2. 森の音楽祭、劇“Once Upon a Time”～3つの物語～にて。「美女と野獣」の野獣（ビースト）を一生懸命演じました。

幼稚園お母さんインタビュー

安城学園の幼稚園に入ってよかったこと

愛知学泉大学附属幼稚園

入園以来一度も泣かず、振り返らず通っています。

この幼稚園は運動を通して、挑戦する大切さや“がんばればできる”ということを教えてくれます。広い園庭や屋内プールなどの充実した設備で、専門の先生から体操や水泳の本格的な指導を受けられるのは、規模が大きいからこそ。活発なうちの子たちにはここだ！と思い、入園を決めました。

運動会では、迫力満点の鼓笛や、息の合った組体操、クラスが一致団結して戦ったリレーなど、心身ともに成長した子どもの姿を見ることができ、とても感動しました。競争心を育て、仲間との絆を大切にする、園の方針にはとても共感しています。

運動の他にも、サマーキャンプや芋掘り、プラネタリウム、遠足など多くの園外活動を取り入れたプログラムで、子どもたちのやる気と可能性を上手く引き出してくれるなあと感じます。広い園庭を利用して、焼き芋パーティーやお餅つき、炊き出しなど、家庭ではなかなかできないことも体験でき、とても楽しんでいます。笑いあり、涙あり、本当に充実した園生活を送っています。



市川 家

母：彩さん

子：汐夏ちゃん（銀河組）

子：赤穂くん（新幹線組）

1. サマーキャンプにて。みんなでカレーを作りました。
2. 運動会にて。息のあった組体操を披露しました。



部活動・サークル

全国レベルの実力! スポーツ系クラブと文化系クラブ。学生・生徒の潜在能力を思い切り開花させます。

岡崎城西高校 OKAZAKI JOHSEI HIGH SCHOOL

陸上競技部



6月の東海高校総体で男子4種目8名・女子4種目12名が全国高校総体(インターハイ)の出場を決めました。また、8月の全国高校選抜大会において、三上嵩斗さんが2000m障害で3位入賞を果たしました。

また、10月の日本ジュニア選手権・日本ユース選手権では、棒高跳で石川拓磨さんが準優勝、走高跳で中西美早さんが準優勝、浅井さくらさんが8位入賞、棒高跳で今泉友里さんが4位入賞にそれぞれ輝きました。

ソフトテニス部



5月の愛知県高校総体では、個人戦で男子5組・女子8組がベスト8に入り、団体戦では男女とも優勝して、それぞれ全国高校総体(インターハイ)に出場。男子は全国高校総体の団体戦でベスト4に輝きました。また6月の東海高校総体では、個人戦の男子と学校対抗の男子・女子の部で見事に優勝を果たしました。そして12月の愛知県高校選抜大会でも、男女とも団体優勝し、全国高校選抜大会・東海高校選抜大会への出場権を獲得。1月の東海高校選抜大会では団体戦では男子は準優勝、女子は第3位に輝きました。

安城学園高校 ANJOGAKUEN HIGH SCHOOL

女子バスケットボール部



愛知県高校総体で準優勝を果たし、全国高校総体(インターハイ)に出場しました。また東海高校総体でも準優勝しました。一方、冬休みに開催される全国高校選抜優勝大会(ウィンターカップ)出場を賭けた愛知県高校選抜優勝大会では見事に優勝し、ウィンターカップは第4位に輝きました。

吹奏楽部



吹奏楽コンクールにおいて、愛知県大会、愛知県代表選考会、東海支部大会と順調に勝ち進み、4年ぶりに全国大会に出場して銀賞を受賞しました。一方、マーチングコンテストでは4年連続で全国大会に出場し、こちらも銀賞を受賞しました。

陸上競技部

5月の愛知県高校総体と6月の東海高校総体で、女子は初の団体総合優勝を果たしました。また、全国高校総体(インターハイ)に男子2種目2名・女子8種目9名が出場。中島恭佑さんは走高跳で5位入賞、小林紗矢香さんは100mHで準優勝に輝きました。小林さんは10月の日本ジュニア選手権でも100mHで8位入賞しました。

愛知学泉大学・短期大学 AICHI GAKUSEN UNIVERSITY AICHI GAKUSEN COLLEGE

バスケットボール部



女子Aチームは、春の東海学生選手権、秋の東海学生リーグ戦とともに優勝し、それに続く西日本学生選手権、全日本大学選手権(インカレ)に出場しました(西日本学生選手権は第3位)。また、東海総合選手権で優勝し、高校生から社会人までが競い合う全国総合選手権(オールジャパン)に出場しました。

一方の男子チームは、春の東海学生選手権、秋の東海学生リーグ戦とともに準優勝で、続く西日本学生選手権、全日本大学選手権に出場しました。

剣道部



5月に行われた東海学生選手権で藤原郁哉さんが準優勝し、7月の全日本学生東西対抗試合に西軍代表として出場。また、全日本学生選手権にも出場し、ベスト32に入りました。

一方、9月の東海学生優勝大会では男子団体で準優勝し、11月の全日本学生優勝大会に出場しました。

